

珍しいことではなかった。常にカメラの前で「メダルを取ります。金メダルの自信はあります。」という発言を期待され、オリンピックなのに第三者的に考えていた。そんな1年間で過ごし1984年2月本番のサラエボ空港に着いた時に、このサラエボで金メダルを取るんですね、という記者からの質問に対し、オリンピックの現実に戻らされた私はある不安を感じていた。もしかしたらメダルを取れない事だってあるんだよな。その不安は見事な中し500M10位と惨敗だった。私も辛かったが私以上に前嶋先生は苦しんだのではないかと察した。

サラエボ五輪が終わり、私は専修大学を卒業した。社会人になりスケートで次期オリンピックを狙おうなんていう気持ちには程遠く、今後スケートを続けるか辞めるか悩んでいた。半年後に前嶋先生を訪ね、もう1度スケートをやりたい気持ちを伝えたがその気持ちはうまく伝わらなかったようだった。しかし、その時前嶋先生は「そういえば彰と半年間会わなかったな、話もしなかったな、五輪後、苦しんでいる彰にアドバイスを送りたいかったが、素直に受け入れられる状態ではなかったんじゃないかな」。私はオリンピックから帰国した時、お世話になった先生方、職員の方々応援してくれた友達、知りあい誰にも会いたくない状態だった。前嶋先生のその話を聞いた時、そんな状態だった私の気持ちを察してくれて、考える時間を与えてくれたと思った。格好よく言えば前嶋先生の無言の助言を受けたような半年だった。その後私は2年間程海外へ1人で行くことになった。

私の最後となるカルガリーオリンピックだが、私はこの大会を最後のオリンピックと考えていた。前嶋先生も薄々感じていたと思うが、私はこの1年間メダルを追い回すのではなくオリンピックのスタートライン

はアルコールも一切口にせず出来る限りの節制をしてきた。カルガリーオリンピックの500Mはくしくも惨敗したサラエボと同じ4組アウトスタート、抽選会に同席した前嶋先生も複雑な気持ちで私に4組アウトを伝えたのではないだろうか。

500Mは自己最高で銅メダルを獲得できた。

各国の選手たちはメダルを獲得した私に、パーツと飲みに行こう、そう誘って来たが、私はメダルを取ったから飲み、とは考えられなかった。サラエボで惨敗しカルガリーでどうにか銅メダルを手中にできたこの4年間の事をじっくり思い起してみたかったのだ。いつ頃ともなく前嶋先生が部屋に来て飲まず食わずで何時間も語り合った貴重な時間を過ごした事が今でも記憶に残っている。

前嶋先生と過ごした現役8年間だが、専修大学入学時、意気込みも何も無い私とスケートを通して世界の舞台へとステージを上げてくれたのは紛れもなく前嶋先生の挑戦するその気持ちだったと思う。その姿勢は専修大学のスケートのレベルアップだけでは無く、今日の日本スケート界の世界進出の根底にあると確信している。我々はスケートに携わっている今、さらにその上に新たなステージを築く責任と義務がある事を肝に銘じておきたい。

最後に、今の日本スケート界の底辺には前嶋先生の考えがしっかり植え付けられていると私は思っています。本当に長い間ありがとうございました。そしてお疲れ様でした。

また時間があつたらスケートの会場で前嶋先生の意見を聞かせてください。

前嶋先生退職に寄せて

孤高の指導者・学者 前嶋孝先生から学んだこと

佐藤雅幸（専修大学社会体育研究所所長）

前嶋先生は、孤高を貫き通した。孤高とは、信念や美学に基づいて、集団に属さず、他者と離れてでも、単独でも己の信じた道を求める者。私利私欲を求めず他者と妥協することなく「誇り」を重視する姿を意味する。

私には、忘れられない言葉が2つある。ひとつ目は、大学院時代の恩師からの言葉「佐藤！お前には、執念が足りない！」。もうひとつは、前嶋先生からの言葉「結局、佐藤さんは辞めたんだから、それは本気じゃなかったんだよ！」である。

日本体育大学大学院で期限付きの助手をしていた私は、教員室の掲示書類をみつけた。それには「専任講師公募：テニス、卓球……担当可能な人物：専修大学」と記載されていた。これまで、他の大学への教員公募の書類は出したことがなかったが、助手の採用期限も満了ということや“テニス実技担当可能な……”の文字があったことで応募する決心をした。この年は、日本フェドカップテニスチーム宮城黎子監督からの依頼で、柳昌子、古橋富美子、井上悦子、岡本久美子、雉牟田明子といった国内トッププロ選手らと共に、二か月間の遠征（アメリカ）に帯同し、

世界のテニスを体感した年でもある。世界のテニスを心に刻んで、「よし！自分も、いつかここで戦う選手を育てるのだ！」と決意した年でもあった。1983年の夏の事である。

紆余曲折難関を乗り越えて、その冬、専修大学の採用内定通知を頂いた。すると不思議なもので新聞やテレビで報道される「専修大学」の文字がどんどん目に入って来るようになった。

時を同じくして、テレビや新聞ではサラエボオリンピックの報道が連日過熱し、スピードスケート黒岩彰（専修大学）の名前は誰もが知るまでになっていた。彼は、世界スプリントヘルシンキ大会で総合優勝したこともあり、マスコミは、金メダル確実とまで書きたてた。私の愛読書「トレーニングジャーナル誌（ブックハウスHD）」でも、前嶋先生の「スポーツ科学を応用したスピードスケートのトレーニング法」の特集記事が度々企画され、数ヵ月後にお会いできる先生の記事を一言一句、噛みしめながら読んだ事を覚えている。

1984年2月、黒岩彰選手と前嶋先生はこれまで長年積み重ねてきた研究と研鑽の全てを証明するために、サラエボオリンピックに挑戦した。

私は同年の4月に、専修大学の専任講師として正式に採用された。

桜の花が咲き、暖かな春風の感じる頃、私の記憶に間違いがなければ、前嶋先生の教授昇格と新任教員歓迎会が料亭「柏屋」で同時に開催されたと思う。当時の年齢構成は、逆ピラミッドだったので、前嶋先生も若手と呼ばれている時代であり、私などは子供か孫のようなものであった。「前嶋君、昇格おめでとう。それから、オリンピック、残念だったけど良く頑張った！」と年配の先生たちから、お祝いと激励と慰めの入混じった言葉がかけられていた。「新任の佐藤雅幸です。宜しくお願いします」と前嶋先生にご挨拶に行ったのは、少し時間が過ぎた頃だった。いつものことであるが、私の経歴はかなり複雑なので、初対面の人に自分を説明するのに時間が要する。私は前嶋先生に自分の事を伝えるときには3名のひととのつながりを話した。

一人目は、高校時代の恩師である清野幸也先生、二人目は仙台大学時代の恩師、佐藤佑先生、三人目は、大学院時代の恩師、長田一臣先生である。

一人目の清野先生は、山形県の陸上競技（400m ハードル）の国体強化選手として順天堂大学大学院（運動生理学専攻）を修了し、私の母校に赴任された前嶋先生の後輩にあたる人物である。保健体育科目の講義授業では、必ずスーツ、ネクタイ着用であり、運動生理学の実践的活用や筋肉の収縮パターンそして乳酸の事も分かり易く教えていただいた。その後、和洋女子大学に赴任され、全日本卓球連盟のトレーニングドクターとしても活躍された。地方で開催された日本体育学会でお会いした際に、「そうか！専修大学に勤めたのか。良かったな！本当に良かったな！君の専門はスポーツ心理学かもしれないが、前嶋先生から沢山学びなさい……」と心から喜んでくれた、広い額（ひたい）と細い目、そして山形訛の今は亡き清野幸也先生を想い出す。

二人目の佐藤佑先生（仙台大学副学長を歴任）は、順天堂大学青木純一郎教授の研究室で助手をされた後、仙台大学に赴任し、運動生理学を担当されていた。前嶋先生とは同じ釜の飯を食べた青木門下生である。仙台大学は、当時、北海道・東北で唯一体育学部のある大学であり、開校8年目の施設も不十分な発展途上の大学であった。私は、自分のテニスの競技力を向上させるために体育学を学んでいたもので、筋力とパフォーマンスの関係に興味を持った。ゼミは、学内でも最も厳しい佐藤佑先生の運動生理学研究室を選択した。通常ゼミは3年生からとなるが、1年生から何でもするからと無理をいって入れてもらった。一年生で、お金も無かったので、先輩たちからご飯を御馳走してもらいながら、実験の被験者や補助者として活動していた。佐藤佑ゼミは、とにかく活気があったし厳しかった。今思えば、この研究室のモデルは、順天堂大学の大学院だったのではないだろうか。前嶋先生は順天堂大学初の聴講生でもあり大学院の1期生でもあることを知った時、私のルーツはそこにあるのかも知れないと思った。当時、仙台大学には大学院は無かったが、学部学生は自分の寝袋持参で、実験やデータ分析をしておりで、実験室の電気が消える事は無かった。余談ではあるが、佑先生は、学生に対して「研究室にあるもの何でも使って実験してみろ。使って壊すなら俺は怒らない。壊れるまでやれ」「私が怒るとすれば、買った実験機器を使わないで飾っている時だからな……」と良く言っていた。実際、私は高価な実験器具を壊してしまったのだが、（少しだけ）怒られた。研究室の主要研究は、呼吸循環樹器系であり、私の役割は、ダグラスバック法にて呼気ガスを集めたり、今は懐かしい旧式のショランダーガス分析装置（Scholander gas analyzer）を用いて肩が痛くなるまでショラン

ダー管を必死に振る事であった。これがトラウマになったのか、きっかけになったのか、その後、筋肉、筋電図、筋力発揮のメカニズムなどに興味を持ち、卒論は猪飼道夫先生とシュタインハウス博士の「筋力の生理的限界、心理的限界」を参考にして書くことにした。

仙台大学卒業後は、一旦、故郷山形のテニスの国体選手として、教員生活を送るのだが、日本体育大学の長田一臣先生の著書「競技の心理」「スポーツと睡眠」と出会い、「俺ら、東京さいぐだ！」と上京した。

三人目の長田先生の研究テーマは、技術や体力に一切タッチすることなく心の側面をコントロールすることによって、競技力は向上するか否かの検証であった。トップアスリートの心の側面に焦点を当て、物の見方、考え方、人生の生き方の訓練をしていた。日本体育大学大学院、助手も含めて5年間お世話になったのだが、忘れられない言葉がある。大学院の授業で、私の競技における体験談（逆転負けのパターン）を話し終わるや否や、「佐藤、お前には執念というものが足りない！」と言われた。「学会で発表されているスポーツ選手の心理的特性は、物事にこだわらない、物事を深く考えない、明るい・などとされているが、こんなものは嘘っぱちだな。日体大にはオリンピックで金メダルを取った人が沢山いるが、彼らは、執念深く、あきらめが悪く（絶対あきらめない）、勝つためにああでもないこうでもない、深く物事を考える奴だね。人づき合いが良いやつなんてあまり見たことがないな」「執念のない選手なんて所詮……ベスト8か4だよ！入賞はすれどもトップにはなれないものだ……」この言葉は、まさに凶星であり、未だにぐさりと心に突き刺さっている。

1984年当時は、長田先生と前嶋先生との間には、接点は無かったようである。しかし、私は、前嶋先生とお会いした瞬間に、二人に共通する匂いを感じた気がした。その理由は、後ほど述べることにする。

新任歓迎会・前嶋先生、教授昇格祝いの後、大学は通常の授業が始まった訳であるが、正直、前嶋先生がその後、何をしていたのかどうしても思い出せない。同時に黒岩彰君の姿も見えなくなった。私は3年間程、生理実験室に机を置かせていただいていたので、前嶋先生は確かに大学で授業をしていた。しかし、活気というかオーラがすっかり消えかかっていたような気がする。そのくらい、落ち込んでいたのだろう。

半年位が過ぎた頃だったと思うが、生理実験室で黒岩彰君の姿を見かけた。それと同時に、生理実験室の活気が戻ってきた。それがカルガリーへのスタートとなったのは言うまでも無い。

前嶋先生は、間違いなくスポーツ科学を実践に応用して優秀なスピードスケート選手を何人も育ててきた。そして、専修大学の学生を次から次へと鍛え上げ、世界的な選手に育て上げ活躍させた。前嶋先生といえば、学会でも低酸素トレーニング、インラインスケート、模擬動作、筋電図、イメージトレーニング、H反射などの研究者として国際的にも有名であるが、スピードスケートの体力や技術の指導をする前に、実は大きな山をたくさん乗り越えている事を知っている人は少ない。前嶋先生の大改革に反発し、殆どの学生が辞めてしまったという事実。大学やOB会から「前嶋監督更迭」の要求があったにも関わらず、一切受け入れずに貫き通した事実。まさに、本気の積み重ねをしてきたからこそ、世界の挑戦の頂点に到達することができたのだと思う。

私は入職後、男子テニス部のコーチに就任し、二部リーグから一部昇格を果たし日本一そして世界へといった夢を見ていた時期でもあった。自分の能力も省みず、前嶋先生の手法を参考にして、取り入れながら、伊勢原と生田を往復する毎日であった。当時、交通費や出張費などがあ

るのも知らなかった。選手と共に汗を流し努力を積み上げてきたが、やればやるほど、当時の監督やOB会との古い体質とぶつかり合うこととなり、ついにはテニス部のコーチを辞めることになってしまった。

今考えても、思い出せないのであるが、気がつけば、向ヶ丘遊園柏屋付近の居酒屋船井亭のカウンターに3人で座っていた。私を真ん中に左に前嶋先生、右に野呂先生であった。私がテニス部のコーチを辞めたことに対して、野呂先生はご自身の体験を語ってくださり、「そうか、そうか……」と理解を示してくれた。一方、前嶋先生は、「結局、佐藤さんは辞めたんだから、それは本気じゃなかったんだよ！」と。野呂先生は、「分かるぞ、わかるぞ……。お前の気持……」

前嶋先生は、「佐藤さんの気持ちなんて、全然分かりません。辞めるということは結局、本気じゃないんだよ……」

前嶋先生（スピードスケート）と野呂先生（陸上）の最強コンビに29歳の私は完全ノックアウトになった事を覚えている。聞けば、前嶋先生と野呂先生とは5歳違いの同期入職。両先生とも寒さ厳しい雪国育ち。信州人と青森県人のコンビネーションは見事でした。あの時、私自身は心の奥底にある本気の「決意」と「執念」に火がついた様な気がする。「今に見ていろ、前嶋孝！」……。その後、女子テニス部を創部し、園田学園大学の16連覇を阻み、日本一になったのだが、前嶋先生からはまだ誉められていない。

「そう、大学日本一ね。んーまあ、良くやったんじゃないの……。でも、こんなもんで喜んでるようじゃダメだな……」という声が聞こえてくる。これは私の想像です。

書いても、書いても、想いがどんどん湧き出てきて尽きません。そういう訳で、全く個人的になりますが、これまで前嶋先生との心に残った言葉を御紹介させていただきたいと思います。

- ①そうね、本気の本気であればたいいの事は可能となるんだよ。でもね、僕の挑戦は、私財も投入したし、様々な人を巻き込んでいるからね……。特に家族には苦労かけたね。
- ②僕は、どういうわけか一期生なることが多い。順天堂大学聴講生も一期生。大学院も一期生なんだよね。
- ③これって、研究？これって論文？ねえ、佐竹さん。
- ④そうそう、佐藤さんも国立スポーツ科学センター（JISS）の設置委員だったよね。でも何で入っていたの？
- ⑤数ある論文の中で、一番好きな論文は何ですか？の問いに、それはね、「模擬動作だな」。佐藤、感激！
- ⑥僕には絶対音感があるんだよ。だから少しでもはずれた音を聞くとしくりこないんだな。久木留先生と吉田先生の歌をどうにかしろ。
- ⑦長野県人は理屈っぽいんだよね。それから、清く、貧しく、美しくだ

な。

- ⑧世界トップレベルコーチ同士の激論。

前嶋孝 VS 佐藤満。結論：屁理屈を言うな！やりたいからやるんだよ！

- ⑨尺八は良いよ。僕、免許皆伝。虚無僧（こむそう）ってわかる？

- ⑩データの入力をやり過ぎて、パソコンのキーボードが擦り減っちゃったよ……。どうしよう。

- ⑪毎日、毎日、毎日、現場で測り続けると、何か見えてくる

- ⑫選手も命がけなら、指導者も命がけじゃなくっちゃ。

- ⑬低酸素室を開発するときは、寝ないで選手を観察した。酸素の供給が止まれば窒素室になっちゃうからね。死んじゃうよ。

- ⑭オールアウトになれば気を失うんじゃないの？

- ⑮自分の限界を試そうとしてオールアウトまでやったが、気を失わなかった。オールアウトだと思っただけだったのかもしれない。まだまだ出来たような気がする。

- ⑯孫は特別だな！ 歩行の筋電図でもとろうかな。

- ⑰講演の資料は、何かカッコよくなっちゃっているけど、表わせない程のドロドロしたドラマがあるのよね。わかるかな？講演しながら思い出して涙が込み上げてきたよ。

- ⑱息子がね、お正月に来て最終講義の資料を見ながら、いろいろアドバイスしてくるのよね。嬉しかったな。

- ⑲最終講義終了後の懇親会。ちょっと待て、娘からメールが来ちゃったよ。泣かせるね。（お嬢さんのメールを齋藤先生代読）

- ⑳かみさんには、本当に苦労かけたよ。ありがとう！

最後に、第6代社会体育研究所長前嶋孝先生へメッセージをお送りします。

前嶋先生は、いつも奥歯を噛みしめていますね。

その、奥歯を噛みしめて発する言葉は、人の心に見事にヒットします。今になって、一旦、見失った先生の姿がやっと見えてきました。

私は周回遅れだったのかもしれませんが。

今は確かに見えています。

どこまで着いていけるのか……また見失うかもしれません。

奥歯を噛みしめて発する言葉は、幾度の苦難を乗り越えた証です。

奥歯をかみしめて発する言葉は、まさに言霊（ことだま）。

35年間の前嶋劇場は、とてつもなく大きな感動を与えてくれました。

専修大学社会体育研究所の所員一同、「前嶋魂」をここに刻み、日々精進していきます。

前嶋孝先生ありがとうございました。心より感謝申し上げます。